

## ◇ 国 語

国 7-1～国 7-15 まで 15 ページあります。

第一問 本学の卒業生である田辺聖子氏が思い出を記したエッセイを読んで、後の問いに答えよ。

私は大阪の樟蔭女専国文科で、安田章生先生のご講義をきいている。昭和十九年入学で二十二年の卒業、先生もそのころは、お若かったわけである。三十幾つでいらしたろうか。

国語学史と文学概論をならったわけであるが、後年、先生にそう申し上げたら、

「ほう。そんなん教えましたかなあ。いかげんなこと、やってたんだらうなあ」  
と破顔された。

しかし私は、先生のご講義は、三十年のちのこんにちまで、忘れがたいのである。

このあいだ私は「しんこ細工の猿や雉」という小説の中で、先生のことすこしふれたが、先生のご講義は、教科書に関係なく、あちこちへとんで、思いつかれるままに、ゆきつもどりつ、ゆるゆると話される、その奔放なカンカイ<sup>A</sup>が、ことさら印象的であった。

先生のお話の特徴は、まず、お声がユニークなことではなからうか。非常にひびきのいい、透りのいい声で、耳に快い。

(中略)

高からず低からず、静謐<sup>せいひつ</sup>で明瞭である。昔の女専の生徒などというのは、人数が三、四十人と少ないせいもあるが、いまの学生のように放恣<sup>B</sup>サンマンではないから、アとして聞くのである。教室中、イのように寂として静かな中を、耳に快い先生の声が、しみとおってゆくのであった。

先生は近代秀歌から「万葉集」「新古今」などまで、べつに系統だてての講義ではなく、折にふれ、四季に応じて思いつくままに話して下さった。国語学史や文学概論の講義は忘れはて、その折々のお話だけが、いまもあたまのどこかにのこって、人生の収穫ともいふべきものになっている。

そのころの先生のお話にはアラン<sup>注</sup>がよく出て来て、先生は、アランの著作などを、ゆっくりかみしめながら、考え考え、よみ

すすむのが楽しい、などということをお話された。国文科の生徒で、アランなどをよんでいる者はなかった。

戦いは数カ月前、あるいは十数カ月前に終わったばかりであった。<sup>(三)</sup>干戈のひびきはまだ耳もとに残っており、敗戦の荒廃と躁狂の嵐は日本中に吹き荒れていた。

そういう中でよく、アランについてのお話は、また格別なるおもむきのものであった。

「人生観などというものは、もう君たちのとし頃で、その原型ができていなくちゃ嘘うそですなあ」

というお言葉も忘れがたいものである。私たちはそのころ、十七、八から、はたちぐらいまでの年齢であった（当時は繰上卒業があったり、予科から進学したりして、クラスの年齢にはばがあつた）。

「人間は、いかに生きるべきかを師に求めるべきだけれども、師には完まったきをのぞむことは不可能だから、君たちは本をよんで、古今東西にわたって、どんな人でもよい、歴史の中から発見してくるといいのだけれども……」

というお話も頭にのこっている。先生の語調には一種のヨクヨウウとリズムがあり、それは、先生の歌人としての資質と無関係ではないかもしれない。使いらされた的確な言葉が ウ なく流れ、余分なものはなく、きつかりと明晰めいせきであつた。<sup>(四)</sup>そしてそのまま、私の心に砂金のように沈殿した。

あとになって、このときの感じを把握できたが、まだ十七歳の少女だった私は、先生によって、「知的明晰」の何たるかを知らされたのである。

(中略)

二十一年の秋だったか、国文科三年生は先生に連れられて万葉旅行に出かけた。橿原神宮前駅から吉野線の橘寺駅へ廻るコースで、今のように飛鳥熱もさかんではなかったから、人影もないのどかな田舎道であった。終戦を経て級友は十八、九人に減っていた。地方から遊学している人たちは、空襲や食糧難のため帰郷したまま、再び戻ってこれなかったからである。

先生の万葉講義を聞きながら、甘樫の岡をながめたりしている私は、故知らず胸がたかぶってならないのであった。そのあと、私は先生に教わった万葉コースのあちこちを、ひとりよく歩いた。そのころから、ある種のたかぶりをあたためつつけて、

やっと「隼 別王子の叛乱」を書いたときは、三十年たっていた。

先生のふかいガクシヨクと、すんだお人柄、そしてお歌にみられる、知性のもつ自由のあかるさでもいうようなもの、<sup>(五)</sup>それが発する磁気の印象は強かった。この春、私は未熟ながら「源氏物語」の口語訳を一部書き上げた。

先生にはじめて謹呈できる本が書いたことを私はよろこんだ。なぜなら、いままでの私の小説は、ある意味でかなり猥雑であったから、玲瓏<sup>れいろう</sup> <sup>F</sup>チヨウテツな詩人の魂をもたれる先生にはどうもお目にかげにくかったのである。国文科出身の女の戯作者として、どうしても一度は挑みたかった「源氏物語」の口語訳が書き上ったのも、実に、学窓を出てから三十年たつてからだ<sup>(六)</sup>。やっと先生と共通の言葉を得た気がして、一巻を送った。先生は、病状が重くなっていられた。二、三巻をもってお見舞いにあがったら、そのときはもうお言葉もなく、泣き笑いのようななふしぎな微笑でうなずかれた。

私は、なぜか、いつまでも先生がご健在でいられるものとばかり信じていたから、呆然としてしまった。

師弟の縁としては、はかないことであった。

(田辺聖子『歲月切符』による)

注 アラン (一八六八〜一九五二) フランスの哲学者、批評家。人間性を信頼したモラリスト。理性主義の立場

から芸術・道徳・教育などの問題を論じた。『幸福論』、『芸術論集』等の著作がある。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A カンカイ

- ① トウカイした建物
- ③ カイキユウの情
- ⑤ 荒地のカイコン

② 古代へのカイキ

④ カイカツな性格

1

B サンマン

- ① 気分をハツサンさせる
- ③ インサンな事件
- ⑤ 経営にサンカクする

② 海外企業のサンカに入る

④ サンイを表す

2

C ヨクヨウ

- ① 幼帝をヨウリツする
- ③ ヨウイなことでは勝てない
- ⑤ 意気ヨウヨウと帰国した

② 人心のドウヨウを恐れる

④ ヨウコウを浴びる

3

D ガクシヨク

- ① ゴシヨクが多い雑誌
- ③ シヨクシヨウ気味だ
- ⑤ 熱意にシヨクハツされた

② シヨクセキを全うする

④ 雑草がハンシヨクする

4

E チョウテツ

- ① コチョウして話す
- ③ 資金をチョウタツする
- ⑤ 利害をチョウエツする

② セイチョウな空気を吸う

④ チョウボウの良い丘

5

問二 空欄  ・  ・  に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

① 肅然

② 惘然

③ 慄然ぶぜん

④ 決然

① 雲をつかむ

② 水を打った

③ 玉を磨いた

④ 風を結ぶ

① とりとめ

② よどみ

③ くま

④ こよ

問三 傍線部(一)・(三)の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(一) 破顔された

① 恥じ入られた

② 気分を害された

③ 顔色を変えられた

④ にこやかに笑われた

(三) 干戈のひびき

① 「干」は「盾」、「戈」は「矛」の意で、戦いのことをいう。

② 「干」は味方、「戈」は敵の意で、敵味方が切磋琢磨せつさたくまする様子をいう。

③ 「干」は数の多いこと、「戈」は犠牲者の意で、戦没者の怨恨えんこんの声をいう。

④ 「干」は干す、「戈」は武器の意で、武器を手入れする間も無い長期戦をいう。

問四 傍線部(二)「その折々のお話だけが、いまもあたまのどこかにのこって、人生の収穫ともいうべきものになっている」の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

- ① 授業で教わった多彩な知識が記憶に残り、その後の人生に役立っている。
- ② 真面目な生徒ではなかったが、授業から様々な人生訓を学び得ることが出来た。
- ③ 授業とは無関係な雑談が、心に残り人生の折節に思い出される癒しとなっている。
- ④ 授業中の余談が、むしろ記憶に残って、学び得た成果といえるものになっている。

問五 傍線部(四)「そしてそのまま、私の心に砂金のように沈殿した」とは、どのようなことを比喩しているのか、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

- ① 歌人でもあった先生の言葉は、純金のように美しく芸術的なものであることを比喩している。
- ② 先生の数々の言葉が、ひとつの思想となって鮮明に心に刻みつけられていることを比喩している。
- ③ 先生の話される、一言一句の深い意味を真剣に受け止めて、忘れないように心にとどめたことを比喩している。
- ④ リズミカルな調子の良い言葉は、あたまで意味を理解する以前に、「音」として心地よく心に響いたことを比喩している。

問六 傍線部（五）「それらが発する磁気の印象は強かった」とは具体的にどのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ① 尊敬の念を抱く生徒に対する先生の影響力は強大であった。
- ② 豊かな教養と知性から発せられる言葉は、力強く説得力があった。
- ③ 学者として人間として歌人として、大いに魅力的な先生であった。
- ④ 芸術家肌の先生の知的で明るい人柄は、磁石のように生徒の尊敬を集めた。

問七 傍線部（六）「やつと先生と共通の言葉を得た気がして、一巻を送った」とあるが、どのような気持ちで著書を献呈したのか。その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ① これまで気軽に書いた現代小説ではなく、懸命に努力して書き上げた『源氏物語』の口語訳だけは読んでもらえる気がしたから。
- ② 女専時代から敬愛していた先生に読んでもらうのにふさわしい、恥ずかしくない作品を書けたという自信を持てたから。
- ③ これまで大阪弁を用いて恋愛小説を書いていたが、『源氏物語』の口語訳は共通語で書いたので、東京生まれの先生にも読みやすいはずだと思ったから。
- ④ 先生に女専時代に古典を習った知識を活かして、その成果として『源氏物語』の口語訳も仕上げたので、卒業生の「答案」として受け取ってもらえると思ったから。



問八 田辺聖子の作品を、次の①～⑤の中から一つ選べ。

① 『桜桃』

② 『舞姫』

③ 『みだれ髪』

④ 『文車日記』

⑤ 『たけくらべ』

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「母語」という表現にはじめて到達したのが、ゲルマン語であるかロマンス語であるか、それは我々、極東の日本人にとってはどうでもいいことだ。粗い地図の上でみれば、それは多数の言語や方言が接してせめぎあうヨーロッパのどこかで、決して家庭の日常のなかでは話されることのない公権力の「父のことは」を破つてあらわれてきた民衆のことはである、ということさえわかればよい。シュピッツァーの論文も、「母のことは」||「俗」||自然||故郷のことは||母の乳というレンサ<sup>A</sup>のなかにあらためて置くことによって、「母語」の内容をいっそう鮮明にすることに貢献したのである。

「母語」ということばに私がとりわけこだわるのは、じつは、日本語にはいつの頃からか「母国語」ということばが作られて、それが専門の言語学者によってさえ不用意にくり返し用い続けられているからである。

母国語とは、母国のことば、すなわち国語に母のイメージを乗せた煽情的<sup>せんじょう</sup>でい<sup>a</sup>かがわしい造語である。母語は、いかなる政治的環境からも切りはなし、ただひたすらに、ことばの伝え手である母と受け手である子供との関係でとらえたところに、この語の存在意義がある。母語にとって、それがあつた国家に属しているか否かは関係がないのに、母国語すなわち母国のことばは、政治以前の関係である母にではなく ア にむすびついている。そのために、これを区別せずいつでも「母国語」を用いていると、次のような奇妙なことが生ずる。

あるとき新聞が、「単一民族国家」と思い込まれている我が国において、その例外をなすアイヌ人やオロツコ人が存在することをあらためて思い起させてくれる、次のような記事をのせた。

(沖縄でおこなわれた教研全国集会でのこと) 「平和と民族」分科会では、民族衣装に身を固めた北海道の少数民族ウイルタ(オロツコ)の北川源太郎ことダーヒンニエニ ゲンダーヌさんの母国語による訴えが静かな イ をひろげた。

それは長年、民族差別の中で苦難の生活を過ごしてきたウイルタの人たちが自らの手で、民族の誇りと文化を守ろうとする

自立の宣言であり、それは同時に日本を単一民族国家としてきた日本人の意識のヘンカク<sup>B</sup>を迫るものでもあった。(朝日新聞、一九七八年二月四日)

私はここで報じられたゲンダーヌさんの行動はもちろんのこと、また、それを支持して、ひろく世に知らせるために記事にした、この文章の書き手にも共感する。そもそもこういう記事は、言語的少数者が置かれている状況にたいする深い理解なくしては書けないものである。それだけに、「ゲンダーヌさんの母国語」にはめまいを感じるほどの当惑をおぼえたのである。

ゲンダーヌさんは北川源太郎という日本名の持ち主であるから、たぶん日本国籍の人であろう。

ウ

、ゲンダーヌさ

んの母国は日本で、その母国のことばは日本語であるから、オロツコ語のことを母国語と言ってしまっってはまずいのである。ゲンダーヌさんのことばは、この「母国語」とはするどく対立するところの非母国語、非国語であるからこそ、ここにその訴えを報じる意義があつたのではなかつたか。ゲンダーヌさんが用いたことばは、国家とは対極にあつて、その国家によって滅ぼされ、滅ぼされつづけてきた、かれ自身の生れながらの固有のことばなのである。それを母国語と呼ぶ矛盾が、これほどゲンダーヌさんに共感を寄せる記者に気づかれず、またその記事を読んだはずの編集トウカツ者<sup>C</sup>にも気づかれず、さらに数百万の読者からもとりたてて疑問があらわれなかつたことに、ことばとその話し手との関係に関する、日本人の平均的な理解度があらわれてはいないだろうか。すなわち、ことばはすべて国語であると考える日本人の考えかたに根深く宿っているこの エこそは、この記事がまさに指摘してきた、「日本を単一民族国家としてきた日本人の意識」をありのままに示しているのである。

ゲンダーヌさんは日本人の国家、すなわちその母国が使用を保障してくれないことばを生れながらのことばとして持っている。学校、役所、裁判所のどこにも、そのことばのための場所はあてがわれていない。だから、そのことばはどんなことがあつても母国語とはいえないのである。もしかしてタイコ<sup>D</sup>にあつたかもしれない、まぼろしの母国を思い描く以外には。

では、こういうことばをどう呼べばいいのか。日本人からみて、ゲンダーヌさんのことばは決して日本語の方言ではないし、ましてや外国語でもない。「民族語」と呼んでみるのもいいかもしれないが、その人の所属しているグループが民族と呼ぶにふ

さわしい規模のものかどうかにも問題がある。このようなばあいこそ、ソシユールの用いた、あのイデオム（＝固有語）ということばが生きてくる。また、その話す個人とことばとの関係を示すには、どうしても母語が最もふさわしいのである。母語は、国家という言語外の政治権力からも、文化という民族のプレステイジからも自由である。そして何よりも、国家、民族、言語、この三つの項目のつながりを断ち切って、

オ

視点を提供してくれるのである。

（中略）

以上のことを考えに入れたうえで、一つのことばをはっきりさせておきたい。あることばへの愛着は、かならずしもフランスとか日本とか、朝鮮とかの国家への愛を伴う必要はないということだ。ゲンダーヌさんの話が美しく感動的なのは、その母語にとつての母国はなくとも、母語そのものと、それを話す人たちへの、ひとりだちした強い孤独な愛を見るからである。

同様にイスラエルに帰ったユダヤ人が、その国家の国民であるか否かにかかわらず、故郷で身につけた母語に示す断ちがたいシユウチャク<sup>E</sup>の気持も、国家をさしおいた、人とことばとの根源的なつながりをあらわにしている感動的なのである。

啄木が「ふるさとの訛<sup>なまり</sup>なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく」とよんだ、そのなつかしいことばは国家のことばではなかった。国家の標準からはじきだされているだけに、そのなまりはいとおしく、なつかしさはいっそう深いものであったのであろう。そのことは、方言の話し手にとっては説明ぬきですぐにわかることである。

（田中克彦『ことばと国家』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A レンサ

- ① 問題点をシサする
- ② サセンの憂き目にあう
- ③ 課題をセイサする
- ④ サコク政策を始める
- ⑤ 経歴をサシヨウする

16

B ヘンカク

- ① 世間からカクゼツした社会
- ② 合成ヒカクのかばん
- ③ 会社のチュウカクを担う
- ④ 賞金をカクトクする
- ⑤ ハカクの値段

17

C トウカツ

- ① 議案をイツカツで審議する
- ② 石油のコカツが懸念される
- ③ 合併でカツロを見出す
- ④ 時間の関係でカツアイする
- ⑤ 拍手カツサイを浴びる

18

D タイコ

- ① 秘書をタイドウする
- ② タイボウ生活を送る
- ③ 植物にギタイする昆虫
- ④ 新人がタイトウする
- ⑤ タイイン暦を採用する

19

E シュウチャク

- ① キョウシュウを誘う景色
- ② 派閥のリョウシュウ
- ③ 敵のシュウゲキを受ける
- ④ 彼氏にごシュウシンだ
- ⑤ 知事にシュウニンする

20

問二 傍線部 (a)・(b) の語句の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) いかかわしい

① 刺激の強い

② 新しくつくられた

21

③ 明らかに間違っている

④ 正体がはっきりしない

(b) あてがわれて

① 補修されて

② 準備されて

22

③ 見直されて

④ 集められて

問三 空欄 ア・イ・ウ・エ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

① 宗教

② 国家

③ 言語

④ 民族

23

イ

① 波紋

② 主張

③ 関係

④ 評判

24

ウ

① しかしながら

② 一方では

25

③ だとすれば

④ 加えて言えば

エ

① 偏見

② 短所

③ 確信

④ 盲点

26

問四 傍線部（二）「それ」が指示しているものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 民族差別を受けてきたウイグルの人たちの独立
- ② 沖縄でおこなわれた教研全国集会
- ③ 日本を「単一民族国家」であると見る見方
- ④ 「平和と民族」分科会におけるゲンダーヌさんの訴え

27

問五 傍線部（二）「ゲンダーヌさんの母国語」にはめまいを感じるほどの当惑をおぼえた」のはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 日本という国家によって消滅させられたオロツコ語を惜しむ強い感情が生じたから
- ② 日本国籍を持つゲンダーヌさんが、日本語ではなくオロツコ語を用いて宣言をしたから
- ③ ゲンダーヌさんの用いたことばを「ゲンダーヌさんの母国語」と表現したことに当惑を感じたから
- ④ 日本を「単一民族国家」とする国の政策に反発を感じる記者の意識に動揺したから

28

問六 空欄 オ に入る最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ① 言語を日本人の平均的な認識によってとらえる
- ② 言語を純粹に個人との関係でとらえる
- ③ 言語を国家と民族との関わりでとらえる
- ④ 言語を母国語と母語との関係でとらえる

問七 本文の内容と合致しないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

- ① ことばの伝え手である母と受け手である子供との関係によって形作られる母語は、政治や国家と結びついてはならない。
- ② 「単一民族国家」と思い込まれがちな日本にも、長年民族差別を受けて苦勞をしてきたアイヌ人やオロツコ人が存在している。
- ③ ゲンダーヌさんに関する新聞記事は、国語や母国語といったことばに対して多くの日本人の有する理解度を如実にあらわしている。
- ④ あることばへの愛着は、そのことばが使われている国家への愛着を前提とし、人とことばとの根源的なつながりにより生まれる。